紹介
私の運動

人と人を繋ぐ力を

椎野　和枝

一九七三年から七年間を広島の街中の比治山と、原爆投下をその日の午後六時に放送したというラジオのアンテナの聳える郊外の祇園安佐に住んだ。夫の転勤に伴う移動で、一歳半の二女を抱き幼稚園児の長女に荷物をもたせて乗った新幹線はまだ岡山止りの時代だった。

早々に仕事のため夫が持ち帰った原爆関係の資料は、頁を開くとくぎ付けになってしまう、これが人の姿かと見まがう凄まじいものばかりであった。引越しの品々の整理はストップのまま山積み、資料から眼が離せなかった。夕食の買い物に乳母車を引き食品を求めて街に出たものの市中を流れる川にさしかかれば、今しがた見た写真の、余すところなく死体が浮いていた当時の光景の川となり、その日は生ものなど一切品を買うことはできなかった。広島のこの衝撃はそれまでの「ベトナムに平和を」の運動への関心と共にその後の私の反戦への思いを一層深めていった。

広島在住の後半、広島の女性のくらしを知りたいと女性史研究会に参加した。会は中国新聞夕刊に「ヒロシマの女たち」と題したコラム欄を与えられ、被爆者・反戦・反核の問題を女性を描くことで考えていこうという企画であった。私は栗原貞子、続編で黒川万千代・竹西寛子を担当した。書き手はふつうの勤務をもった女性や主婦、取材を含め大いに個人の力量がためされた。後に『ヒロシマの女たち』は続編と共に本として出版された。共著を創ったこの繋がりは今も続き、本作りで得たものはその後の各自の活動のための力を培ったように思える。

広島から今住んでいる神奈川に移ってから、都内では情報交換をするグループを、地元では草の根の女性グループを仲間と共に立ち上げた。ふだんは女性の生活とかかわりの多い、女性と年金、子育て支援、福祉市民社会を創るといったテーマを取り上げている。

だが有事法案が出された前後などは、有志として講演会の場をつくった。今後も憲法問題をとりあげ国民投票法案や、私の暮らす地域は座間市には近い土地柄、日米軍事再編についても話を広げたいと願っている。

時事問題や政治問題を日常的に話すことに不慣れな人に対して、広島の被爆者のことも含め、どのように伝え続けられるのか。どんな言葉でどんな語り口で解りよく話せるのか。

被爆者でない者がその痛みを私の内部に一過性でなく分かち持つ精神をどう持続するのか。今日の私の場合、例えば栗原貞子の詩を読み返すこと、例えば竹西寛子の新たに出た「『いとおしい』という言葉」をひもとくこと、田口ランディの「被爆のマリア」を読んで新たな感覚を自分の中に研ぐことであろうか。個人の意識の強さを時に養い個人で進められることがある。仲間と連帯でやってこそ意味の深いこともある。人と人を繋ぐ力を創って行くことが大事であると思う。転勤者の役割の一つかもしれない。

（しいの・かずえ、本会会員）

表紙絵画の作者

佐久間　修（さくま・おさむ）大正四年三月三十日、熊本県上益城郡御船町に生まれる。昭和九年四月東京美術学校油画科に入学、十四年三月卒業。卒業後すぐ結婚した妻・静子との間に二人の子をもうける。十八年六月より熊本県立宇土中学校教諭となる。十九年十月二十五日、勤労動員令により生徒を引率した長崎県大村市海軍航空廠でB29の空襲をうけ被弾し、戦死。享年二十九歳。